

(国語)

「自分の思いや考えを伝え合う力」を育てる国語科の指導

―話を聞き、理由や根拠を自分の言葉で伝える―

大阪市立川北小学校 学力向上研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では以前より、主題を「自分の思いや考えを伝え合う力を育てる」として、各教科、学級・学年における日ごろからの指導を行ってきた。5月に入り、昨年度の学年担任と新年度の学年担任が児童個人についての引継ぎとは別に、学年全体の「雰囲気」と「対応」について話し合う研修会を複数回行った。その中で、各学年の特徴・課題が浮かび上がってきた。

その上で新年度の担任でそれぞれの実態と前年度までの取り組み、学習指導要領の目標を鑑み、今年度の方針の骨格を方向付けていった。学校全体で共通してみられたのは、「他者の意見を尊重し、自分の意見とその理由と根拠を伝える」ことについての課題であった。

そこで、学校全体では、1・自分の考えを書く 2・自分の考えの理由を書く 3・交流の場を持つという3点を念頭に置いた取り組みを進めた。

2. 研究の趣旨

(1) 研究の視点

- ・様々な方法を用い、自分の思いや考え伝え合う力を育てる。
- ・各学年の実態に合わせた学習課程の工夫を図る。
- ・各学年では、課題を以下のように設定し、宿題や日常のルーティンワークなどを含む日々の指導や授業内容・方法にフィードバックしていくことにした。

(2) 各学年の取り組み

第1学年 「語彙を豊かにし、相手の話を聞ける子」

音読や視写、板書をノートに書き写すなどを日々繰り返し、基礎を身に着ける取り組みをした。それと並行しながら、発問し一人一人に考えを持たせ、教科書のどこを根拠にしたのか発表させることにより、意見と簡単な理由が言えるよう取り組んでいる。

第2学年 「語彙力を鍛えて、自分の意見を理由とあわせて伝えることができる子」

「聞き方あいうえお」を利用し、聞き方を示すという取り組みを行った。また、授業場面だけでなく、日常でも話型を示して話すように努めた。動画や物語文など、細かい言葉の意味などを説明してきた。ICTにおいては、クロームブックを活用し個別最適化した学習に取り組ませることができた。

第3学年 「人の話を聞ける子」

人の話には相槌を打ったり、しっかりうなずいたりするという指導を日常から行っている。週末には「インタビュー宿題」として、「犬派？猫派？」などの質問をし、答えとその理由を聞いてくるという取り組みも行った。

第4学年 「相手の意見を聞いて、自分の考えを発表する子」

デジタル新聞を購読し、インプットを増やす取り組みを行った。また、宿題では感想を書かせてからの要約やキーワードを使ってまとめる活動、字数を制限しての要約など一度文章の内容を咀嚼して自分のものにするというプロセスを経て、自分の言葉で表現するという活動に力を入れた。

第5学年 「傍観者ではなく 自分の言葉を持てる子」

テーマトーク、テスト前には互いに一問一答などすることを設定し、繰り返すことで定着するよう

に努めた。書く力を養うために、「文章を書く」「題を決める」「2段落で書く」など条件を指定して文章を書く練習を行った。また、「さいころすごろく作文」に取り組んでいる。

第6学年 「自ら考えることができる子」

話型を使用して話し合い活動を行いやすくした。また、意味調べを行い、わからない漢字を調べる時も国語辞典を活用した。学習に興味を持って取り組めるように、「kahoot!」や「スライド」を使用してクイズ対決を行った。休み時間なども楽しく学ぶ時間もできてきている。

3. 研究の概要

(1) 研究組織と研究協議の進め方

- ・右図のような組織を編成し、実践的な研究に取り組む。

① 研究協議会のもちかた

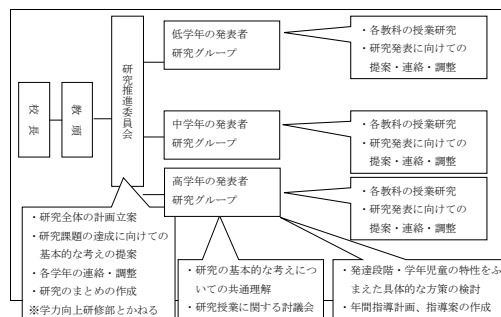
- ・研究授業後の協議会では、短冊方式を活用したワークショップ型グループ協議を取り入れ一人一人が意見を出しやすい、活発な協議になるようにする。

② 協議の視点

- ・伝え合う力（児童の表現力）
- ・指導方法の工夫（教師の発問等）
- ・学習課程（板書・ノート・ワークシート・学習形態の工夫等）

③ 短冊（付箋）の色

- ・よかった点（ピンク） 気になった点（青色） 改善への提案（質問・疑問）（黄色）



4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ・各学年の実態をとらえて目標設定をした。付けたい力を明確にし、付けたい力にぴったりの言語活動を設定し、取り組むことができた。
- ・各学級に応じた話型やハンドサイン等も含めて話す時のルールを設定することで、「どのように話せばよいかわからない」ことが理由で発言できない児童が発表できた。
- ・ペアやグループでの学習を取り入れたり、書く活動を事前に取り入れたりすることで、自分の考えが深まり、また先に仲間からの共感を得ることによって、なかなか意見が言えない児童も自信をもって話すことができた。
- ・ICT機器を活用し、心の動きなど可視化しにくいものや書き順などの動きのあるものを感覚的にとらえやすくなるように工夫した。児童自身が学習履歴などで自分を振り返り、次の課題をみつけ、取り組むことができた。

(2) 今後の課題

- ・「一人学び」「二人学び」「グループ学習」やワークシートや教材教具の内容などを工夫していく必要がある。
- ・指導者の説明が長くなったり、ワークシートの書く量、カードや付箋の数が多くなったりと情報過多になることで時間がかかり、十分に設けるべき交流の時間が少なくなった。重要な情報を精選する必要がある。
- ・1人1台学習者用端末の利用については、様々な可能性が考えられ、より一層の有効活用が今後の検討課題である。